



僕が彼を初めて見たのは、今年の七月に行った永年勤続者表彰式の席上だった。この永年勤続者表彰式というのは、障害者が十年以上、会社に勤続した事を表彰するものだ。

僕は、養護学校を卒業してすぐに今、勤めている「ほのす」という、パン製造兼喫茶店に十年間勤めた事が評価されて、表彰される事になった。それを知ったうちの親はすごく喜んでくれて、めでたいからという理由で表彰式に行く直前にわざわざ、母が赤飯を炊いてくれたくらいで、僕自身はそういう事をされて、照れくさかったが、嬉しいと同時に浮かれていた。

そのような浮かれ気分で表彰式の舞台である、僕の母校でもある養護学校にバスで向かった。家の近くの駐車場から、僕がバスの中に入っていると、一番、後ろの席にいた小学生らしい子供、三人が僕の周囲を指差して、馬鹿にしたように笑っていた。

僕は、自分の周囲の何がおかしいんだか分らなかった。そういえば、こんな事はずっと前からあった。今までは特別に何も気にしなかったのだが……とにかく、僕はそのまま空いている席を見つけて座った。

駐車場から養護学校までは十五分くらいだ。その間、iPodで音楽を

「おお、直也！久し振りじゃないか。先生は嬉しいぞ、俺の教え子が表彰されて」

先生にそう言われて、僕は何か言おうとしたけど、嬉しくて何も言えなかった。

本当は色々と言いたい事がたくさんあるのに。それを知ってか知らずか先生は続けて、

「いやあ、俺は、本当に嬉しいぞ、ああ、そうそう、司会も俺だからな」

「アツ、ソツそうなんですか」

「ああ、お前の晴れ舞台をしっかりと見てやるからな」

「アツアツありがとうございます」

「それでな、式が終わったら、色々と話したい事あるし、後で、俺んところ来い」

「ハツハツハツはい、ワツ分りました」

それから、受付を終えた僕は、表彰式の式場である二階の会議室に向かった。

会議室に入ると入り口近くの席で、僕が勤めているぼのすの社長は誰かと喋っていた。何か、喋れなければいけない。そう思っ言葉を絞り出

すように叫ぶように「アッあの！シャ社長！今日は、ポッポッ僕なんかお招き」

ここまで言ったが、社長は僕の顔を一瞬だけ見て

「あっちだ、あっちに座って、待ってろ、ほら、お前の名前があそこに、大きく書いてあるだろ？」

そんな風に行われれば、その後は何を言ったらいいか分らず、すぐに社長が指で示した席に着いた。

確かに、自分の名前、白井直也の字が大きく書いてある紙が、窓際の席に貼ってあった。急いで、その席に座ろうとした。ふと、僕の隣の席を見ると、その席にも同じく名前が書かれてあった。『灰野誠一』と。その名前を確認するまではっきり、僕だけが受賞できるものかと思っていたので、半分は残念に思った。

もう半分は、こんなすごい賞を独り占め出来る事によって、今後、ぼのすで注目を浴びるプレッシャーみたいなものを感じて、余計、働き辛くなるかも知れないとも思っていた。

なので、僕一人が受賞をしなくて良かったと安心した。

しかし、表彰式が始まるまで五分前なのに、まだ、彼は来ていないよう

だった。いくら何でも、今日の主役の一人が来ないなんて事は無いだろうが、社会のマナーとして、ましてや、こういう大事な式典なのだから、せめて、五分くらい前には来ないといけないような気もするのだが……

そう思っていた時に彼がやって来た。僕は彼が隣の席に座ったら、社会のマナーとかを教えようと思っていた。けど、そんな考えは彼を一目見た時、消えてしまっていた。何故、消えたのか？彼の障害の程度は僕と同じくらいであるのは分る。脳性麻痺独特のよろけそうな動きであるけど、車椅子にも乗っていないし、クラッチという松葉杖みたいなものも使っていないからだ。それにも関わらず、彼にも言えなくなったのは、彼の雰囲気だった。

僕は、養護学校出身だし、ぼのすも障害者中心の職場なので色々な障害者と会ったりしているが、彼、灰野誠一は、僕が今まで会った障害者のどこにも属していない感じを持っていた。喋った事も無い、しかも、一目見ただけで、そういうものを彼から感じ取ったというのは、明らかに変な事である。その事は正直、僕自身も信じられなかった。

同じ障害者にこんな事を言うのは、もしかしたら失礼かも知れないけど、
それ

ろうね」

そう僕が言うと、彼は驚いたように急に僕の顔を見た。しかし、すぐに何事も無かったように、僕よりは少し食べるくらいの感じで僕に言った。

「ああ、そっそうだね」

素っ気無くそう言うてから、携帯をポケットから取り出して、いじり始めた。多分、メール確認だろうと思っただが、あまりにもルールから外れているような気がしたので、僕はこう言った。

「メールも、ダツダツ大事だけど、イツイツ今は、授賞式なんだから」
そう言うと、彼はすぐに、うっとうしそうにこう答えた。

「めっめっメールじゃねえよ、ゲームだよ」

ゲーム？ゲームをやっていたのか？最初、僕は母親にでも、メールを送っていたものだとばかり思っていたので、それならば、ある意味仕方ないと感じていたのだが、ゲームと聞いたら声を張り上げて、ゲームなんかしてんじゃねえ、こんな大事な授賞式の日、と言おうと思った矢先に、マイクを持った司会の温水先生が、黒板の前に立ちこう言った。

「えー、これから、第六回、永年勤続者表彰式を行います」

温水先生その声に、さっき感じていた彼の不満感が消え、代わりに、

緊張感が自分自身に現われて来た。緊張している自分とは正反対に、隣の彼は携帯でゲームこそしていなかったが、リラックスをしているように感じられた。彼は、椅子にゆったりと自分の背を預けていたからだ。僕はといえば、この表彰式を支援している、障害者雇用推進協会という会の会長でもある、ぼのすの社長の挨拶や、僕の町の町長や職安の所長の祝辞も耳に入らなかったくらいに緊張していた。けど、温水先生の受賞者紹介の時に、自分の名前が呼ばれた瞬間に、その緊張は少しは溶けた。だが、自分はそれから、すべき事があったのに、すぐに、そこから動かなかった。やがて、もう一度温水先生の声が聞こえた。

名前を呼ばれて、ハッとした。そうだ、僕は表彰状を貰うんだ。急いで、協会の会長でもある社長が待つ表彰台に向かった。社長は表彰状を僕に手渡した時、小さい声で、だけど、優しくこう言った。

「おめでとう。これからも頑張れな」

そう声を掛けてくれ、嬉しくて、涙が出そうだった。でも、実際は、出なかった、白けてしまったからだ。つまらなそうに表彰状を受け取って、興味無さそうに席に戻るまでの彼、灰野君を見たからだ。何て、つまらなそうにしてるんだろう。

一体、何が彼をつまらなくさせるんだろうか？彼を見て、混乱していた僕を正すかのように温水先生が少し、声を大きくして、言った。

「次に、受賞者挨拶。白井直也」

それを聞いた時、不思議な事に自分の緊張が完全に溶け、さっき、名前を呼ばれた時とは反対に、すぐに椅子から立ち上がり、スーツの胸ポケットから紙を取り出し、それを読み始めた。

「僕は高校を卒業した後、今の会社、有限会社ぼのすに、就職をさせてもらいました。

最初の内は、何が何だか分らず、戸惑う事ばかりでしたが、会社の先輩の方々に優しく御指導を頂きました。この十年、色々とありましたが、これから、十年、二十年と今の会社、ぼのすで働きたいと願っております。最後になりましたが、

僕なんかの為に、このような授賞式を行って下さり、本当にありがとうございます。ありがとうございました」当然ながら、自分は吃りがあるので、紙に書かれた言葉をスムーズに喋れたわけではない。しかも、緊張の為、自分自身、何を言ったのか分らなかった。

でも、僕の挨拶が終わり、一礼をすると、大きな拍手の音が聞こえ、

「ヒツ暇、ですよ」

「そうか、それは良かった。実はな、俺な、障害者の為のサークルを作っけてな」

「サークル、ですか？」

「そうだ、こう言っちゃあなんだけど、暇を持て余している障害者が、休日を有意義に楽しんでもらう為に、色々と同じ趣味の仲間を作って、皆と楽しむサークルなんだけど。どうだ、お前も来ないか？」

「イッイッ行きます」

「そうか、じゃあ、パンフレット渡しておくからな、絶対、来るんだぞ」

しかし、僕はすぐに返事をして後悔をしていた。同じく、廊下に出て来た灰野君にも僕と同じように誘っていたからだ。正直、彼とはもう関わりたくないと思っていたからだ。折角の休みなのに、彼と一緒にいるかも知れない。そう思うと、何とも言えない、嫌な気分になってしまい、日曜はずっと、家でボンヤリしていようかと考えていた。障害者余暇支援サークル、ひまわりのパンフレットを握りしめながら。

日曜というのがこんなにまで重く感じるとは、今まで思いもしなかった。原因は分かっている。コウモリのような、あの男、灰野誠一とまた、

顔を合わせてしまうかも知れないと思うと、いつもは楽しくて、待ち遠しい日曜日がおっくうで仕方なかった、

しかも、今年はまだ、七月だというのに、熱中症で倒れる人が沢山いるというのに。だったら行かなければいい、何度も思ったが、それを思うと同時に、仮に、僕が行かなかつたら温水先生を裏切るような気がして、嫌だったから、結局、昼食を食べたら、渡されたパンフレットを手にし、家を出た。

温水先生に渡されたパンフレットの最終ページに書かれてある地図を確認すれば、そこは僕の家から歩いて二十分くらいだった。自転車に乗って行ってもいいのだが、たまには、健康の為に歩いて行く事にした。

健康の為とはいえ、僕のフラフラとしている足では、かなり、きつく、暑かった。それで、目的地から半分の距離にあるファミリーマートに、休憩をする為に入った。中はヒンヤリとしていて、気持良く、いつまでも、そこにいたかった。しかし、そこにいつまでもいるわけにはいかないし、それに、只いるだけでは店員に悪いような気がしたので、十分くらい適当にマンガ本を立ち読みしたら、ジュースを買ってそこを出た。

外は、相変わらずの暑さだった。しかし、エアコンが効いていた場所から出ると、周囲の空気が暖かく感じられた。それと同じように自分の心も温かく感じられ、何故か凄く嬉しくなって、気持ちも浮かれて、家を出る直前の憂鬱感もすっかり忘れてしまった。

そんな浮き浮きした気分で、さっきのジュースを飲みながら歩いていくと、前方から親子連れが歩いているのが見えた。お母さんは僕より少し上くらいな年齢であって、男の子は幼稚園くらいだと思いが、男の子は僕の視界に入ると、彼は僕の方角を、興味深そうに、動物園で見た事の無い動物を見るような目で、見始めた。すぐに、その子の視線に気付いたお母さんは、男の子を叱って、何故か知らないが、僕の方角を見て頭を何回も、何回も下げて来た。男の子は何で自分が叱られ、何で自分のお母さんが謝っているのか分らずに、お母さんと僕の方角を、不満と不審の目で、交互に見比べていた。お母さんはそんな息子の腕を、無理矢理に引っ張って、その方角とすれ違うのは嫌だとばかりに、急いで曲り角を曲がって行った。

彼らとすれ違わなかった僕は、自分が関係しているわけでは無いのに、安心感と不快感が入り交じったような、奇妙な感覚に囚われてしまった。

やがて、その感覚は、表彰式に行く時に乗ったバスで出会った、小学生くらいの男の子達を見かけた感覚に似ている事に気付いて、気持悪くなって、吐き気がした。表彰式から一週間は経ってなく、まだ、その感覚を鮮明に覚えていた僕は、余計、吐き気がして、すぐに、家に帰りたくなった。ひまわりに行く事をすぐに中断する事も出来たのだが、ひまわりは、地図によれば、もうすぐで着く筈であったので、頑張って行く事にした。

実際、吐き気を感じた場所からは、ひまわりまで、三分も掛からなかった。

思っていたより何だか、パツとしなかった、というのが、その初めての印象だった。山小屋ではないが、何かそういう感じだった。心密かに思い描いたものとは全く違い、全く違った場所に来てしまったような気が持だった。でも、その建物の木の看板には障害者余暇支援施設ひまわりと書かれていた。

確かにここだ、そう確信した時、後ろから驚くような大声で

「直也！来てくれたのか！」

あまりの声の大きさにビックリして、すぐに後ろを振り向くと、温水先生がいた。先生は笑顔で続けてこう言った。

い僕に対し、

温水先生は、やっぱり。といったような顔付になって

「結局、何もしないんだろ？せいせい、家でゴロゴロしてるんだろ？」

「エッ、ええ、まあ、そんなとこです」

「だろう？何か、それだと、折角の休み、もったいなくねえか？」

先生にそんな事を言われるまでもなく、ゴロゴロとしているのは、確かに、休みがもつたいたいと思う時もあるが、それは、ほとんどの人がそうではないかと思っていたので、今までは、特に何も感じなかった。でも、今、そう言われると、

折角の休みを、もっと、有効に使わないといけないと思った。

「なっ？そう思うだろ？」

いつまでも何も答えないでる僕に先生は確信を持ったようにそう言ったので、僕もそう思っていたところなので、素直に

「はい、タッタツツ確かに、モツモツもつたいたいと、オツ思います」

「うん、うん、そうだろうな、だから、俺はここを立ち上げたんだ」

「エッ、コツコツここって、先生が作ったんですか？」

「まあ、ここを作ったのは俺一人ではないけど、俺がここを作ろうと、最初に言い出した事は、確かだな」